

第 33 回土木計画学研究発表会(春大会)企画セッション

「PI・市民参加」発表と討議の要旨

論点1:PI に運営者として携わる人の問題

どう育てるか?何が資質として必要か?技術士や RCCM のような資格制度は必要か?

専門性,プロセスのゴールをちゃんと認識していること,中立性が必要.

ファシリテーション技術は必要

専門的技術,人的ネットワーク構築努力,資金調達能力が必要.

技術として後から身につけられることと,人柄のようにそうではないことがある.特に市民とのコミュニケーション能力は後者に左右され,それは利害関係者との信頼関係構築に影響する.

町医者と専門医のように必要とされる技術も場合によって異なる.

再開発コーディネータのような資格も参考になる.

ゴールが定められた PI プロセスなら技術として身につけられることでも対処できるかもしれない.しかし,まちづくりのような,狭い地域でしかも終わりの無いような継続的に検討する事業では,人柄に依存する(属人的な)ことが資質として必要となるのではないか.

PI 運営者として関わる人を金銭的に支える仕組みは必要である.

論点2:ステークホルダー(利害関係者)の特定や検討の方法

ステークホルダーをどのように探すか?どこまでの範囲をステークホルダーとするか?ステークホルダーの差別化はどのように行うか?ステークホルダー間の関係はどのように把握するか?

関係団体への呼びかけ+一般公募で行う場合が一般的だが,芋づる式に利害関係者をリストアップしていく方法もある.

ステークホルダー分析として,「プロセスへの不満」「内容への不満」「生理的にいや」といった区別の仕方がある.

どこまで範囲を広げても利害は存在する以上,そもそも利害関係者を限定する必要があるのか.広げすぎてもきりが無い.

利害関係者は,closeなのかopenなのか,利害の粗密,によって区別は可能.その上で,コアの部分とその周辺部分を緩やかに分けて,対応を変える必要がある.

利害関係者はできるだけ広く取っておいた方がよい.

あらゆる利害関係者の代表を選ぶのは難しい.例えば「自転車利用者の代表者」は探しにくい.米国では自転車利用者の組織があって代表を選出することが可能かもしれないが,我が国にはそのような組織がないことが多い.

論点3:アンケート調査の功罪(PI ツールの得失)

何を質問項目とすべきか?何を質問すべきでないか?質問方法や意見集約方法がもたらすバイアスはどのように考えたらよいか?

自由回答は否定的なものが多く,これだけを分析していると賛成者の意見や silent majority の意見はさらに見えなくなる傾向がある.

自由回答でのアンケートは,代替案を絞るようなプロセス後半には向いていなくて,市民の関心

や価値観を探るプロセス前半においてより効果的ではないか。

自由回答型と選択型という二種類の調査形態を、対象や目的によって適切に使い分けることが望ましい。

自由回答の中でも質問文や疑問文の形を取っている意見が、利害や関心を表明しているにも関わらず捨てられるのが懸念される。

意見の量的な分布を知ることより、反対意見や少数意見の存在を確認し、その反映方法を検討することに意味がある。

「賛成か反対か」ではなく、「市民の関心」を取り出す技術の開発が必要である。

#### 論点4:PIのプロセスデザイン

プロセスをどのように設計したらよいか？スムーズに行く、あるいはいかないプロセスとはどのようなものか？良いプロセスマネジメントとはどのようなものか？

PIプロセスのステップをきちんと区切ることは、時間管理上有効。

賛否ではなく、利害や関心に着目することは有効。

プロセスの妥当性についても、事前に市民に問うておくことが有効。

関係者分析をすること、行政ではなく第三者がプロセスを進めること、全員で合意文書を作ることは有効。

PIの目的に応じてプロセスを変えることは有効。

プロセスデザインとはPDCAサイクルが必要と言うことであり、何かあれば臨機応変に変えていける柔軟性が必要。そのような場合、行政よりも第三者機関の方が柔軟に対応できる。

PIプロセスを運営する側としては盛り上げたくなるものだが、バランスを見ながら水を差す(冷静になるようにする)ことも必要。

構想段階のように次の段階が存在し(先送りでき)、さらに致命的なことが起きなければ、プロセスをきちんと決める必要はないのでは。

プロセスを仕切る人が必要。それは行政側でも第三者でも有り得る。

プロセスを仕切る知識や技術は持つておく必要がある。

市民は、しばしば構想段階と事業段階の区別が付いていないことが多い。

現在プロセスのどこにいるかということを再三説明することは有効。

従来の協議会・委員会方式で議論して決めていくプロセスで十分な事業もある。

プロセスの良し悪しを論ずる場合には、事業者側からだけでなく、市民の側から見るという視点も必要。

時間管理の視点からは、単に時間が速い遅いという評価ではなく、当初の計画と比べて計画通りか遅れたかという評価がよいのでは。

プロセスを検討するにあたり、何を目的とするかを改めて認識する必要がある。

#### 論点5:PIの効果

PIの効果にはどのような項目が挙げられるか？それらはどのようにして測定するか？計画主体から見たPIの評価は必ずしも高くないこともあるが？

効果的かどうかを評価するのではなく、十分にできたかを評価することが重要。

効果を論ずるには、それが何のためのPIかというPIの目的を認識する必要がある。

透明性、公正性を評価することも必要。

事業者は当初「矢面に立つのはつらい」と思っていた節があったが、PIを終えてみると満足度が

高くなっていた、ということがある。

評価には、コミュニケーションという視点と、市民がどう受け取ったかという視点がある。前者は情報提供でもあるので「やらないよりもやったほうがいい」ということになるし、後者は市民がどう受け取ったかという観点で判断し、市民がよいと思ったらよいし、そうでなかったら悪いという評価になる。

PI を運営していて、「技術者として最高の案を作りたい。そのためには市民の意見を全ては聞いていられない」という考えと「PI をすることでよりよい案になる」という考えの2つが浮かんでジレンマに陥ることがある。前者の場合にはPI を否定的にみる評価になる。

#### 論点6:その他

今後PI をよりよいものにしていく上で、重要な論点はあるか？

市民の関心をつかむのは重要という点は確認できたが、その関心をどうやって反映させていくかという議論は今回のセッションでは不十分だった。

以上